

画日記十三号

共八十四日

真野晴高上

晴高画

特別
子4
6354
1



44
6354
-1





地獄太夫と高須の遊廓
 須の遊廓にさる名妓ありと知られし地獄太
 夫々認めし短冊なりといふを同市の或る舊
 家に秘蔵しあるを見るに
 朝顔の花よりもろさかりの世に 地獄女
 その日ぐら七に咲ぞたのしき



丁酉十日 寧り



此の
おはし

岩
おはし

下
おはし

此の
おはし

又
おはし

おはし

丁酉 九月 寧り



此の
おはし

此の
おはし

和
おはし

此の
おはし

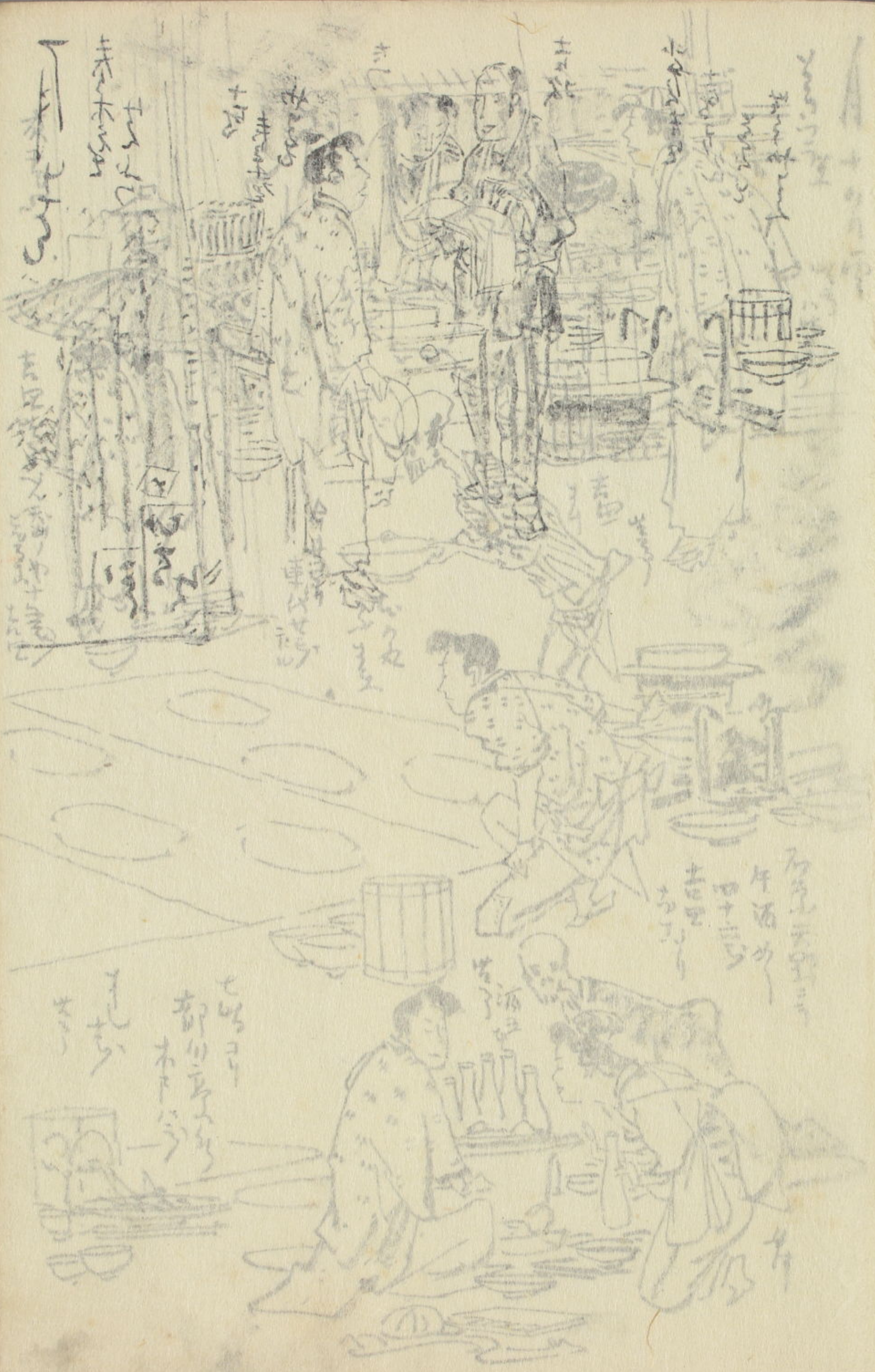
神
おはし

此の
おはし

此の
おはし

此の
おはし

了月十日
市打屋



Is the
Kensan

吉原
入道
十郎

七
都
木

午酒
四
土



友子

吉原の町

新太

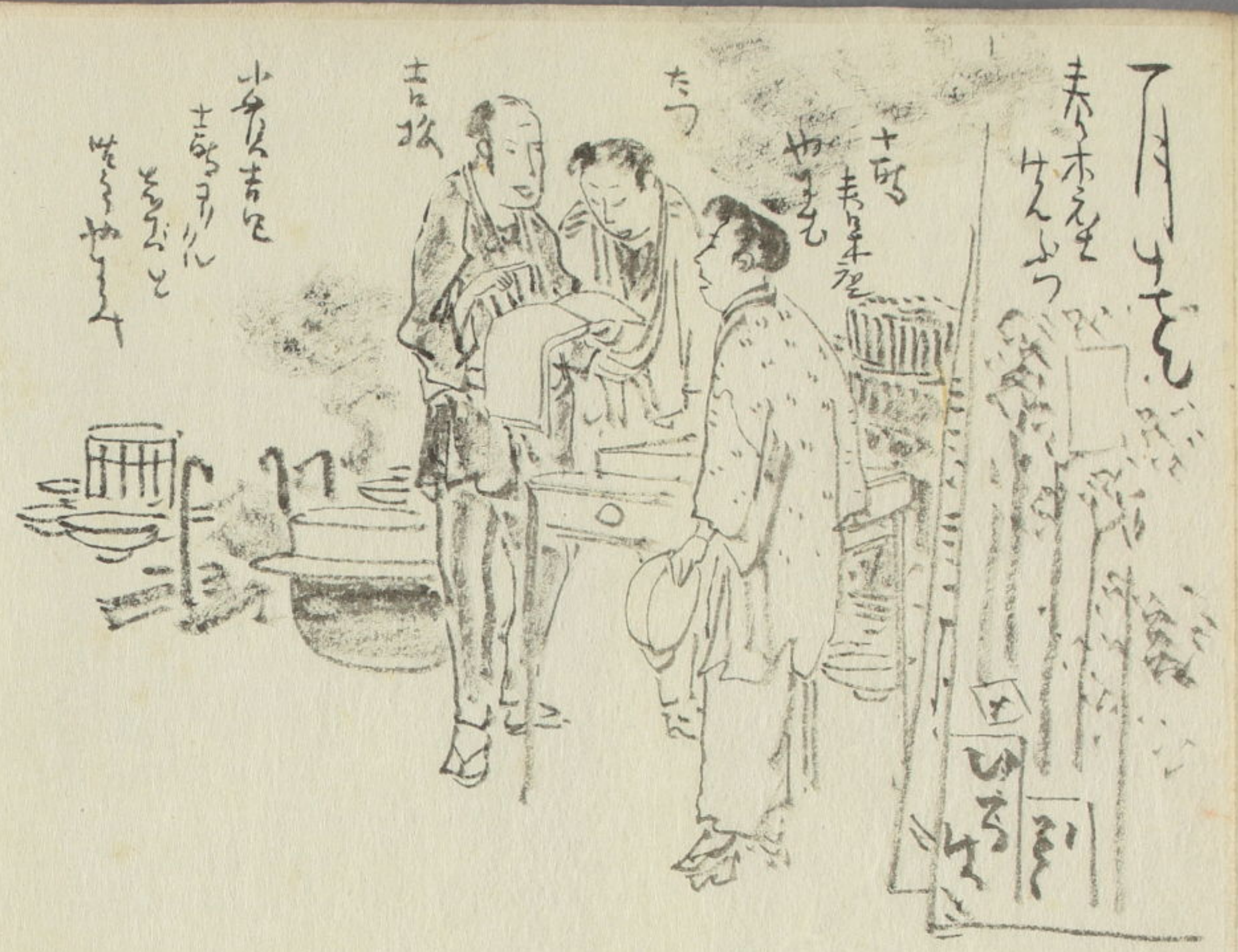
今井

石野

七郎

村

月十日



月十日

少年

土

た

十

五



喰う
一月
と

天
二

天
二

喰
二

喰
二

金
二

喰
二



九
二

二
二

二
二

二
二

二
二

二
二

二
二

二
二



二月十一日

朝打松丁へ

源太郎内

十時

公儀

銘

今

三



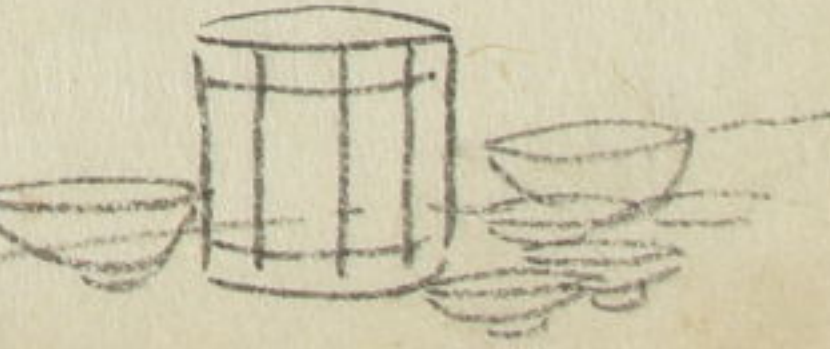
二月十日

十時

女



五



二月十二日

村松丁
源太郎ゆき子



おきり
おきり
おきり

おきり

おきり

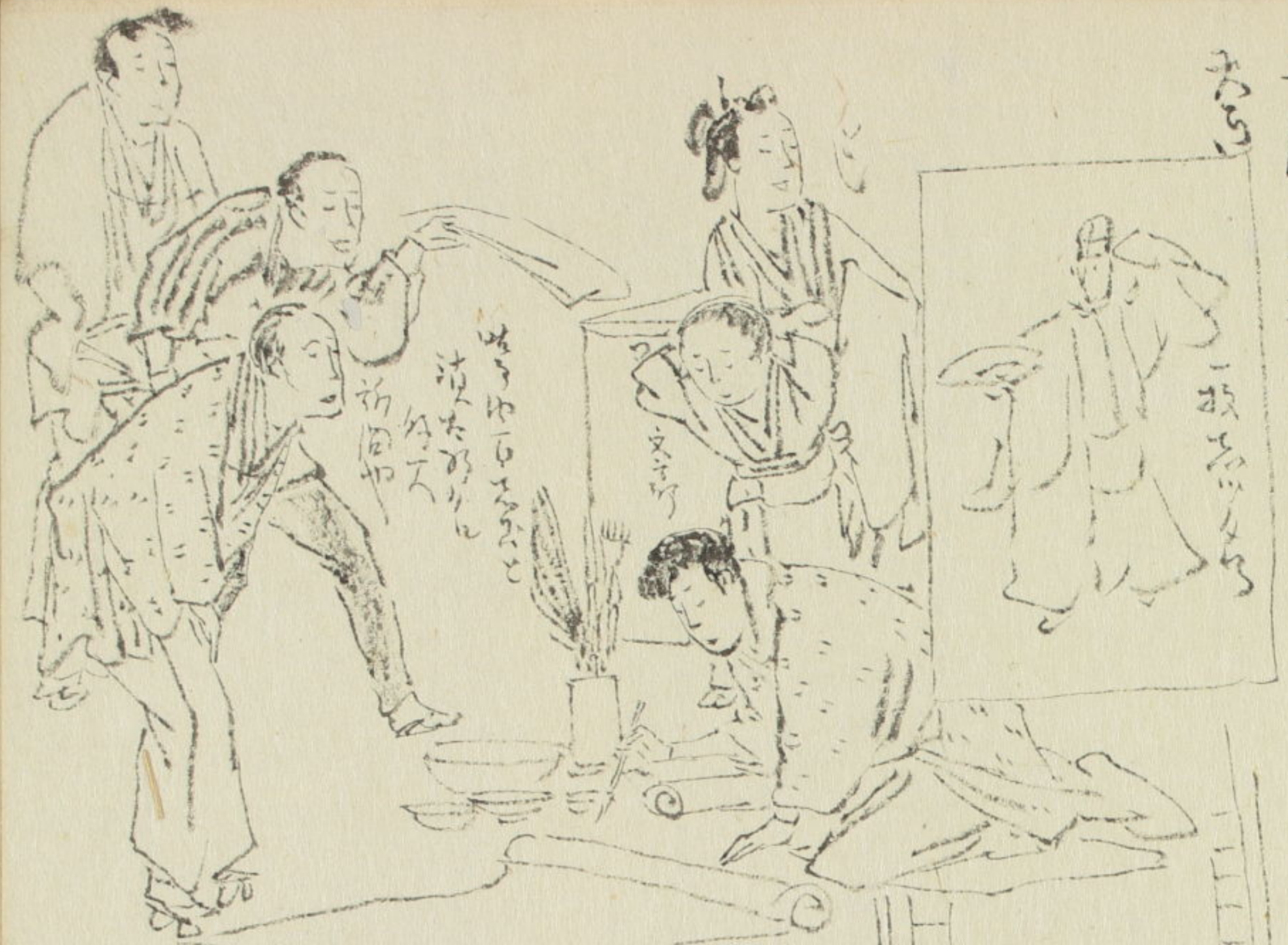
おきり

おきり

おきり

仲号は太郎
源太郎ゆき子

二月十三日



おきり

おきり

おきり

おきり
おきり
おきり

おきり

おきり

おきり



二月十日



狂言

モリ
文子

朝
あさ

二月十日



少年

おれ
と
う
さ
は
う
さ

と
う
さ



二月十日 天の夜の字
加賀老上



天の夜
加賀老上





二月廿七日
新芝丸

重岡場
大石

十時
少前
四時

今一人
月
今一人

今
今

二枚

夜平松也
徒山あり
夜とあり

重岡場
十時
今



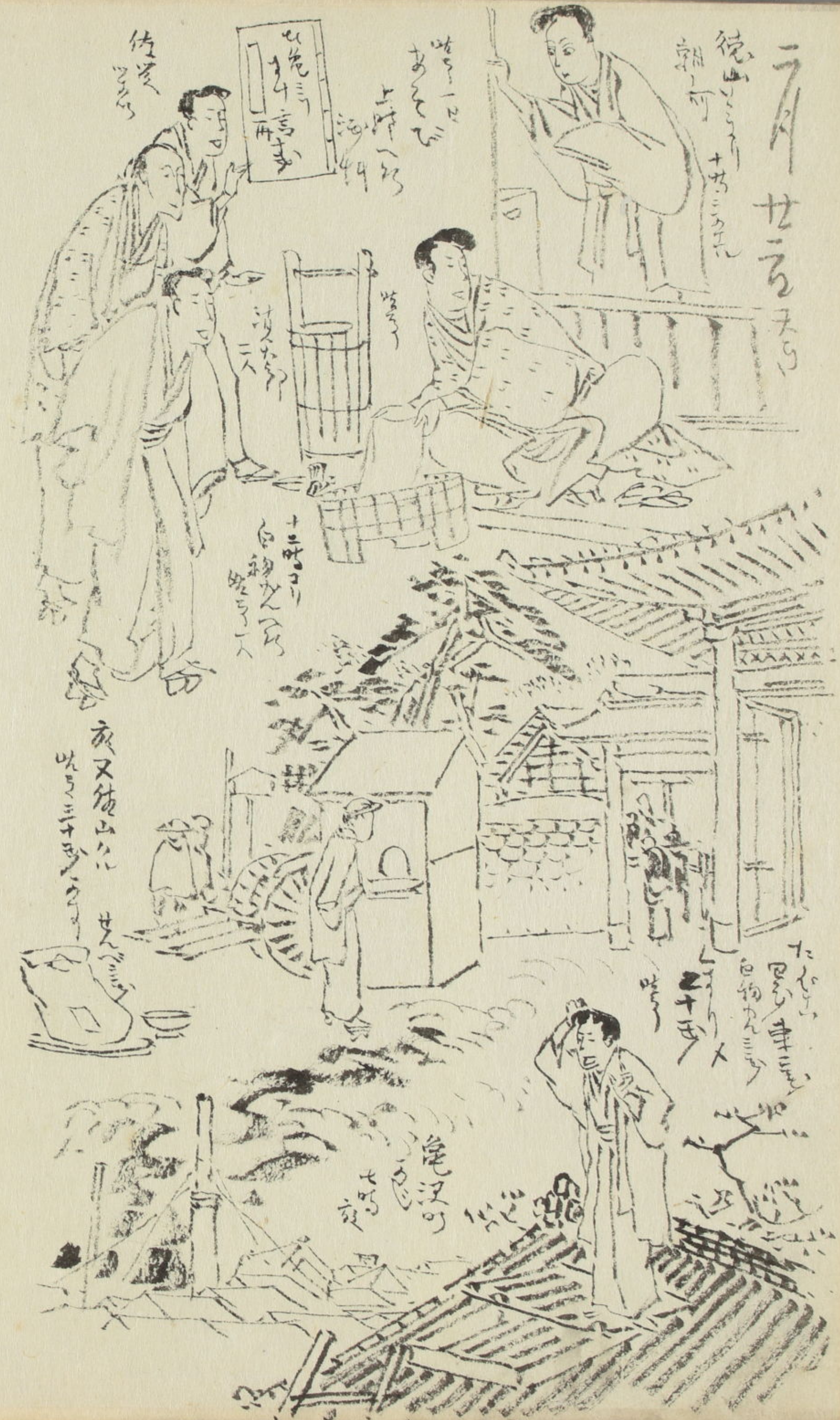
二月廿七日
三時

今
今

今

今

今
今
今



二月廿三日



吉原
徳山

二月廿四日



吉原
徳山

二月廿五日



吉原
徳山

吉原
徳山
三入
徳山
文也

吉原
徳山

吉原
徳山

二月廿二日

吉野

吉野

徳山



福英をへ今日

福英を

二つを

中を

420

420

420

二月廿二日

徳山



小

小

小

420

420

420



沙州
馬通火也
共年二月廿日
夜九時
漢京子五

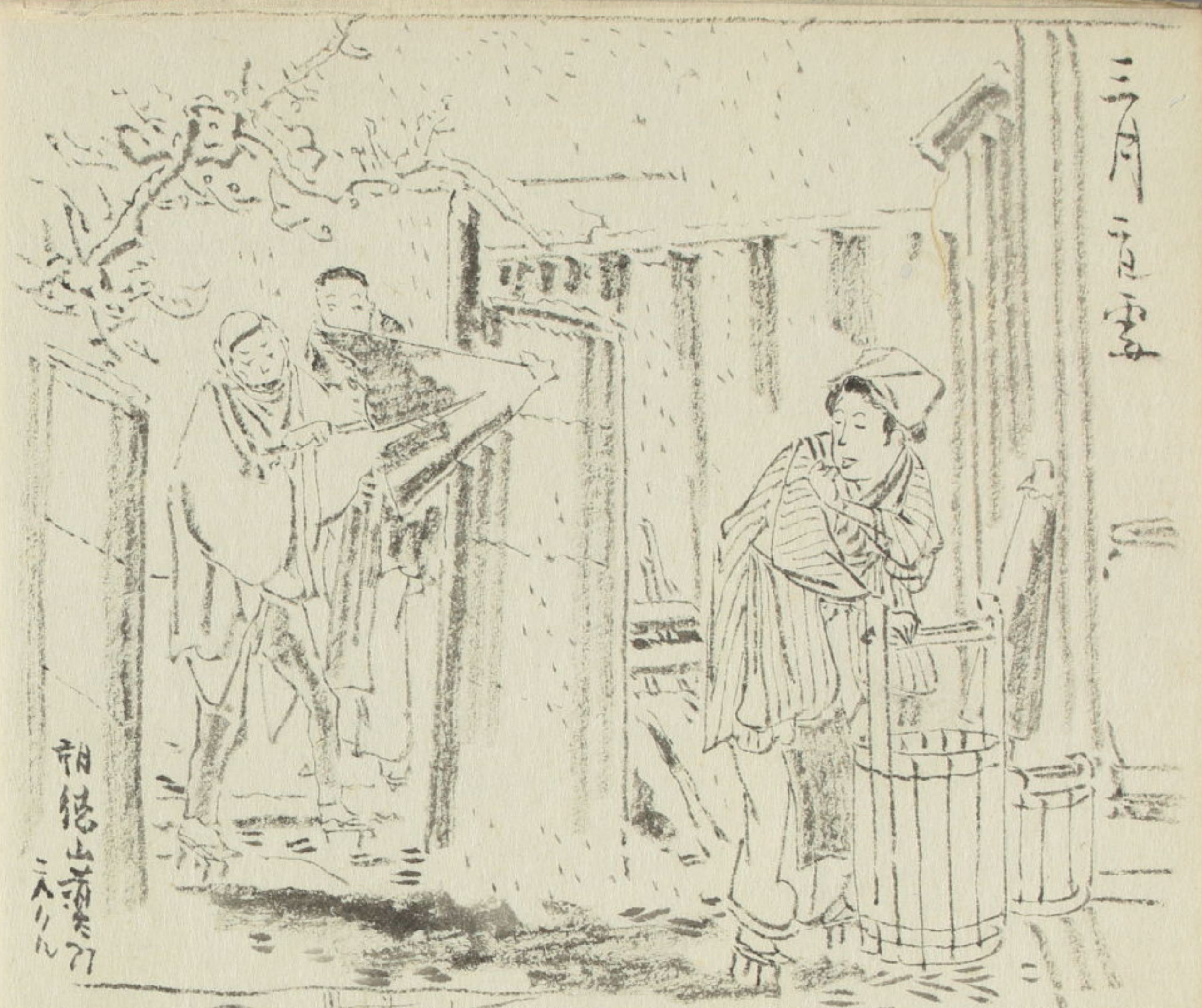
三月一日 朝事



三月一日 朝事



三月五日



朝徳山新築
二八ノル

徳山
新築



狂言
二八ノル

徳山
新築

三月五日 天

明治



明治

少年

明治



十三
のり

寺
下
大
人
の
し
ら
せ
し
て

二月六日

町屋
中島
少年
大人



同日夜更



北町
五町
三町

二月七日

町屋

朝市
いり
十



老
巨
画
サ



少年
大人
七



蝶

夜
五

二月
十日
十一日
十二日
十三日
十四日
十五日
十六日
十七日
十八日
十九日
二十日
二十一日
二十二日
二十三日
二十四日
二十五日
二十六日
二十七日
二十八日
二十九日
三十日

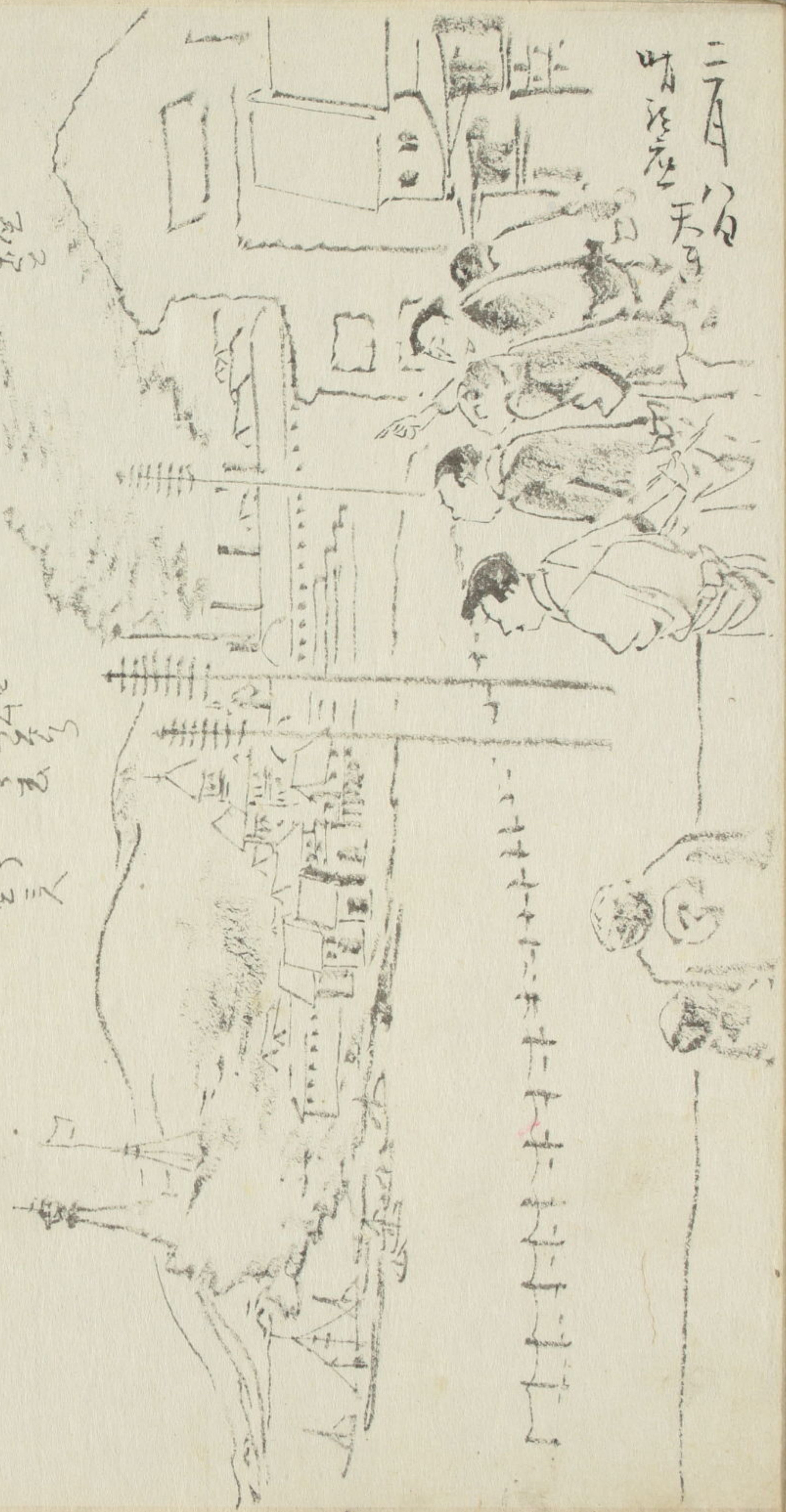


二月
十三日
十四日
十五日
十六日
十七日
十八日
十九日
二十日
二十一日
二十二日
二十三日
二十四日
二十五日
二十六日
二十七日
二十八日
二十九日
三十日



二月
十三日
十四日
十五日
十六日
十七日
十八日
十九日
二十日
二十一日
二十二日
二十三日
二十四日
二十五日
二十六日
二十七日
二十八日
二十九日
三十日

二月
十三日
十四日
十五日
十六日
十七日
十八日
十九日
二十日
二十一日
二十二日
二十三日
二十四日
二十五日
二十六日
二十七日
二十八日
二十九日
三十日



二月
十三日
十四日
十五日
十六日
十七日
十八日
十九日
二十日
二十一日
二十二日
二十三日
二十四日
二十五日
二十六日
二十七日
二十八日
二十九日
三十日

二月
十三日
十四日
十五日
十六日
十七日
十八日
十九日
二十日
二十一日
二十二日
二十三日
二十四日
二十五日
二十六日
二十七日
二十八日
二十九日
三十日

三月十二日
天
海竹屋



二月十日
五年三月十日



土曜

東又内

方

小芝ノ
天

新田

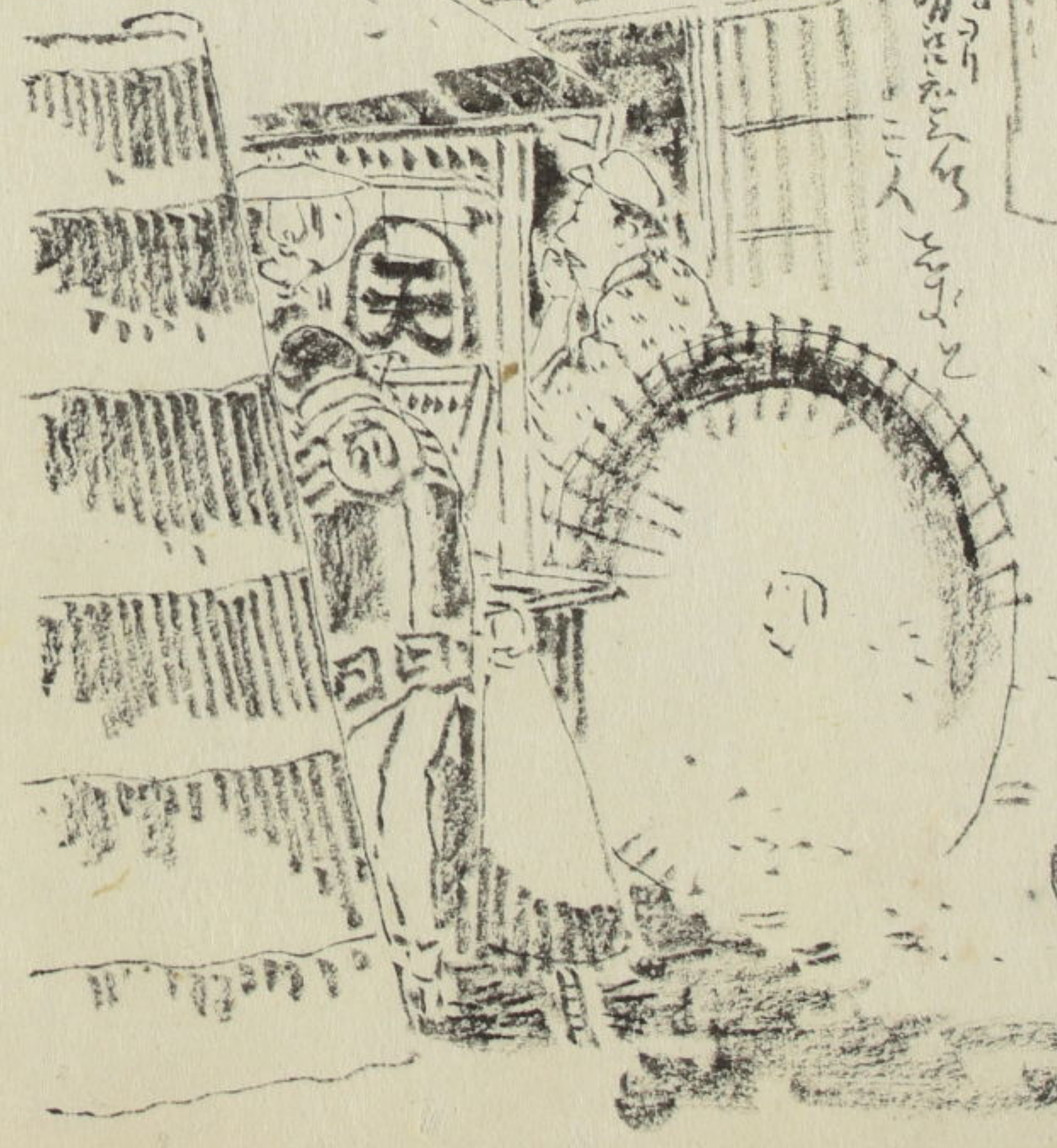


下あ

土曜

天
天

天



二月十日



土曜
山

夜
山



山

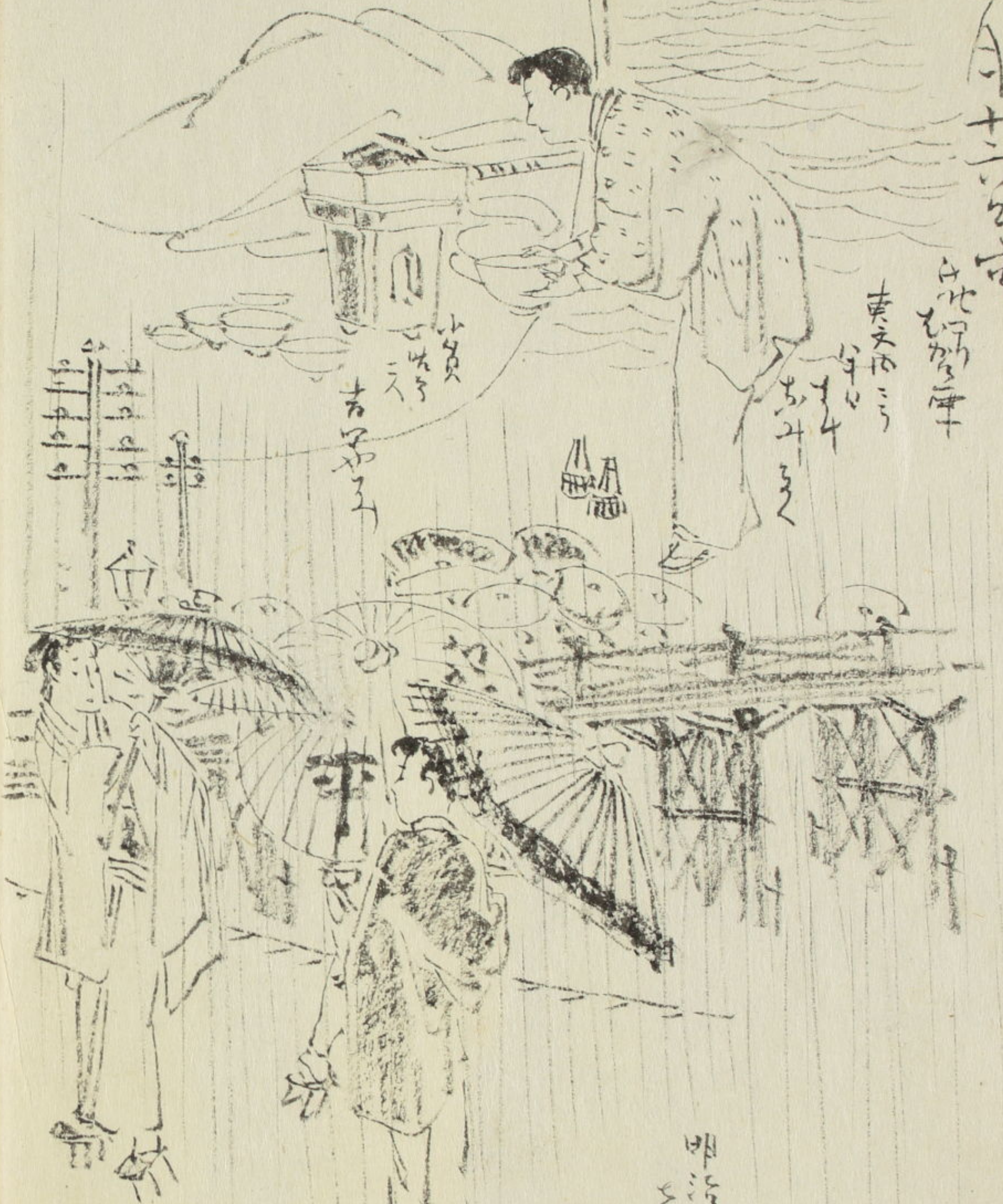
山

三月十二日

北の町

文の町

あまのこ



山崎
文の町
あまのこ

明治

あまのこ

あまのこ

三月十七日

明治

あまのこ

あまのこ



あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ



11月15日
11月15日
11月15日

11月15日
11月15日
11月15日

11月15日
11月15日
11月15日

11月15日
11月15日
11月15日



三月十八日

近頃の
様子

朝の
むかしの
様子

おはよう
おはよう
おはよう

おはよう

安国神社
の様子

女

馬場町

前川

三

おはよう
おはよう
おはよう



朝七時
中一
中一



夜半
三友
くわび
りかぶ
ハシ



三月廿日
三時
廿七
廿八
廿九
初四
清
十五



十
三

今
車

二月廿日

三時



おたけ

清太郎

お国

お国

お国

お国

お国

お国

お国

お国

お国

お国

お国

お国

今井
車以三

二月廿七日



お国

お国

夜明け

三友

お国

お国

お国

お国

二月廿七
公の書

とらつて
紅丹
ひか
あし
山
て
の



夜
あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

三月廿八
公の書

大
あ
あ
あ



あ
あ
あ

あ
あ
あ

三月廿日 天の川に舟をこぐ



舟のり
舟のり
舟のり
舟のり
舟のり
舟のり
舟のり
舟のり
舟のり
舟のり



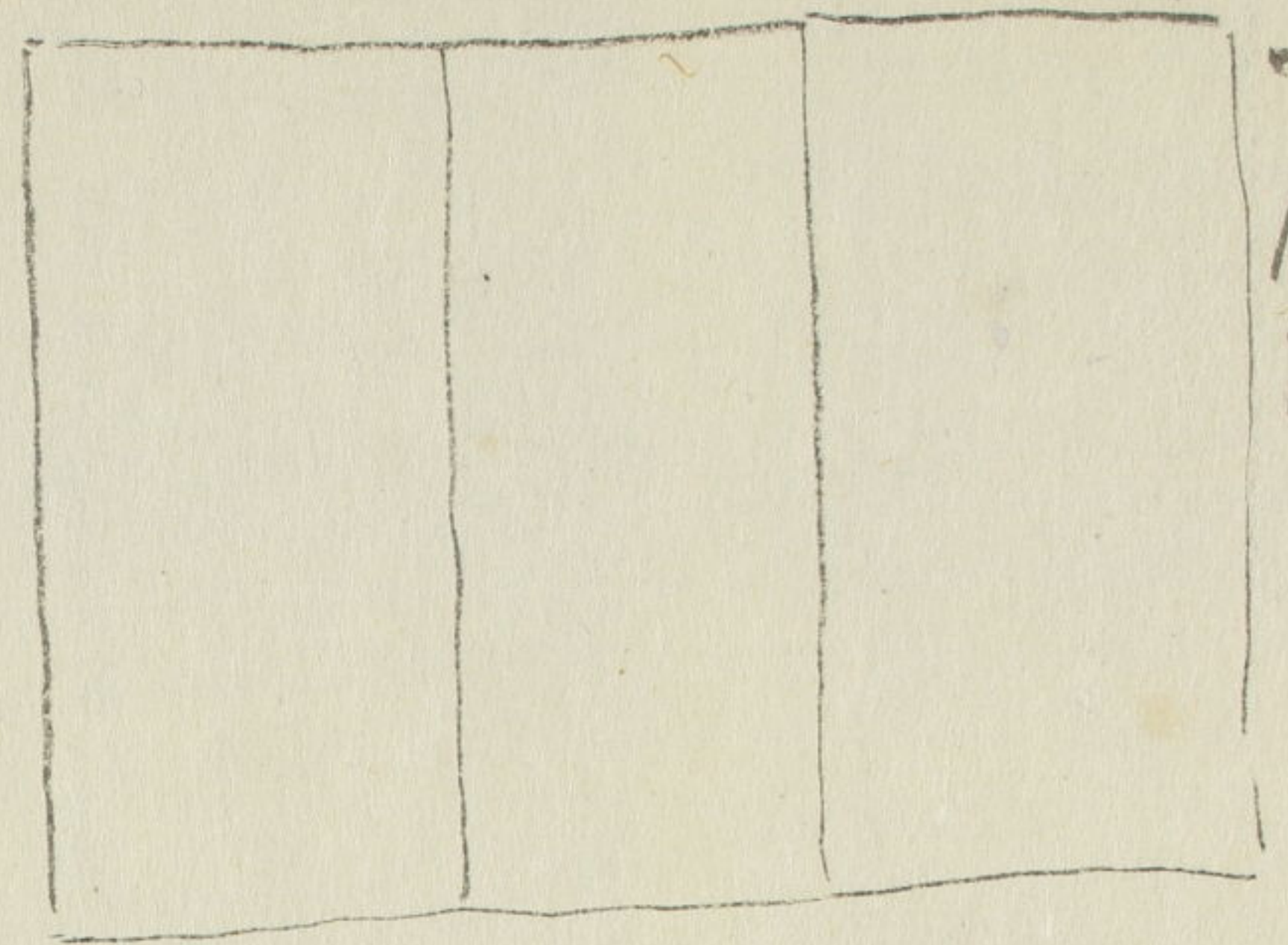
舟のり
舟のり
舟のり
舟のり
舟のり
舟のり
舟のり
舟のり
舟のり
舟のり

三月廿日 天の川に舟をこぐ

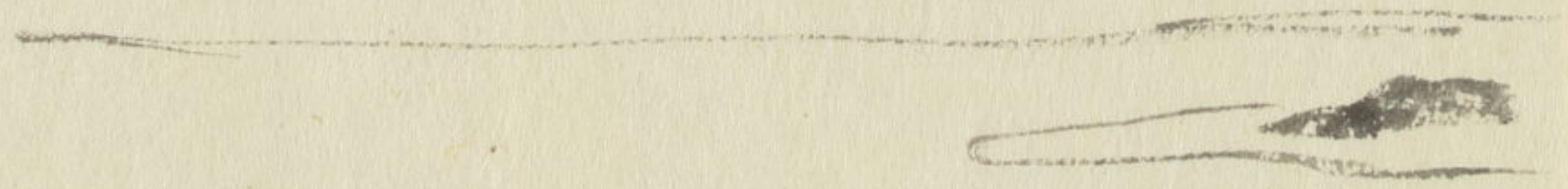


舟のり
舟のり
舟のり
舟のり
舟のり
舟のり
舟のり
舟のり
舟のり
舟のり

2/1/15



2/1/15



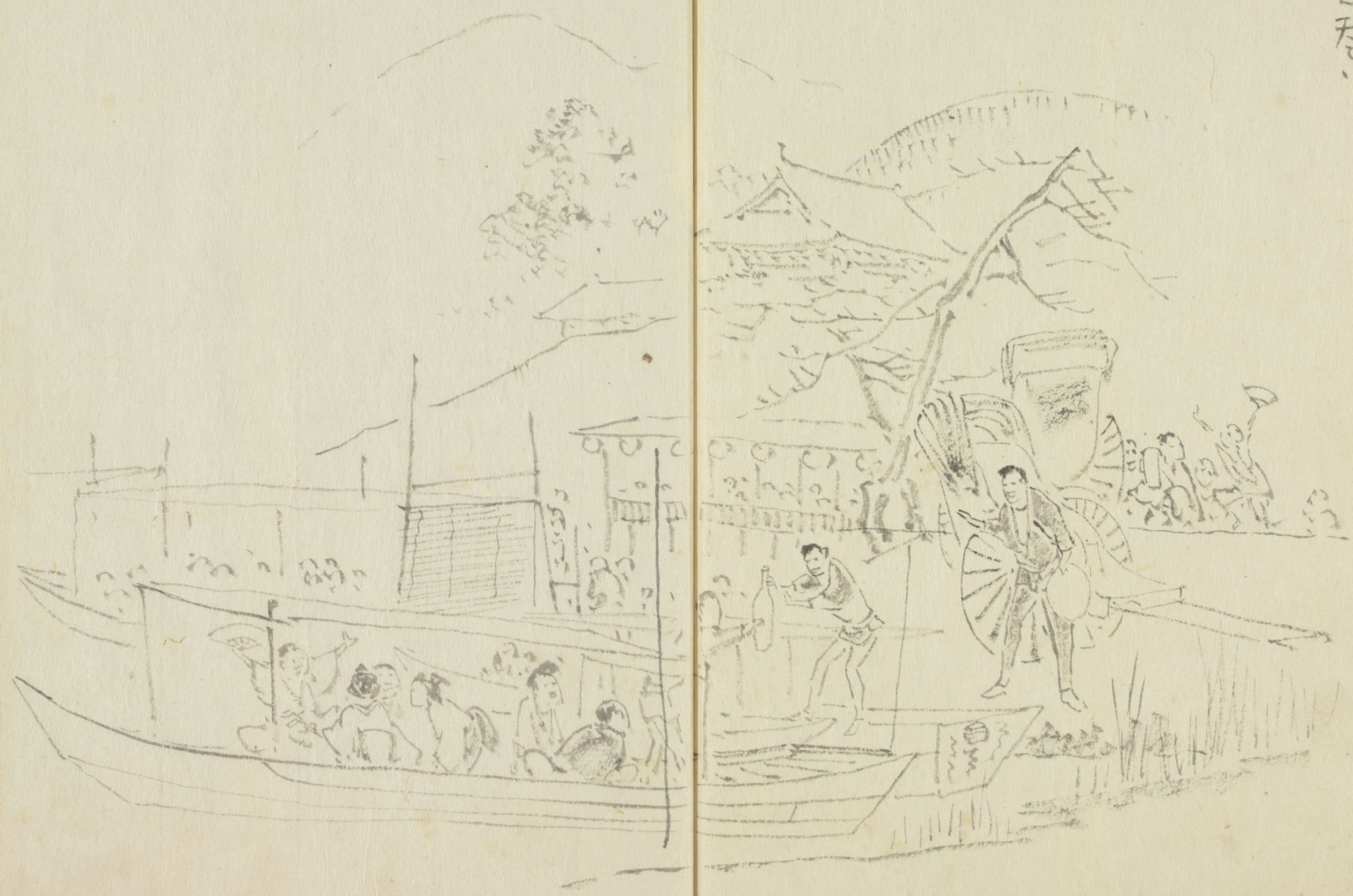
中
十
二



中
十
三



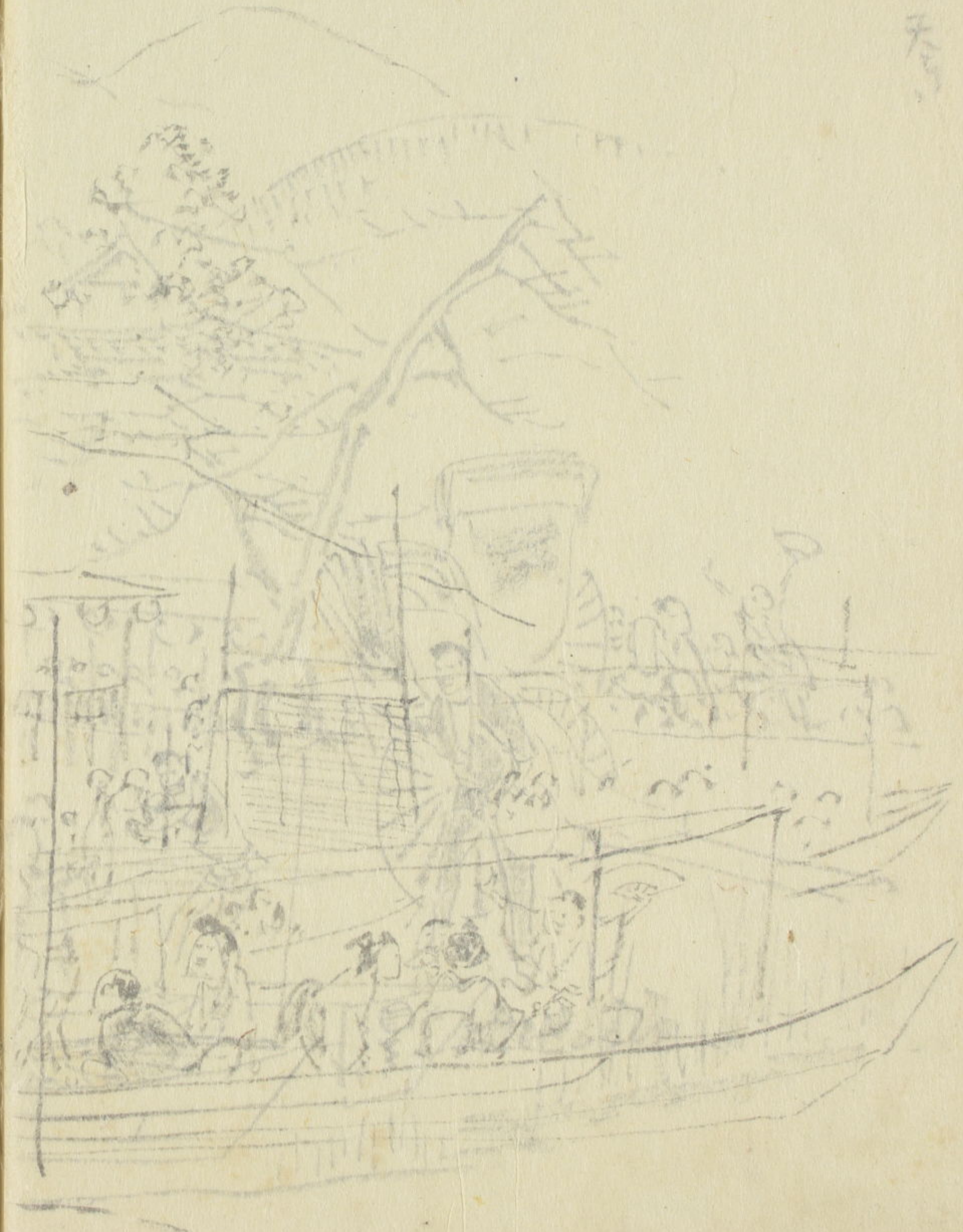
丁巳年五月

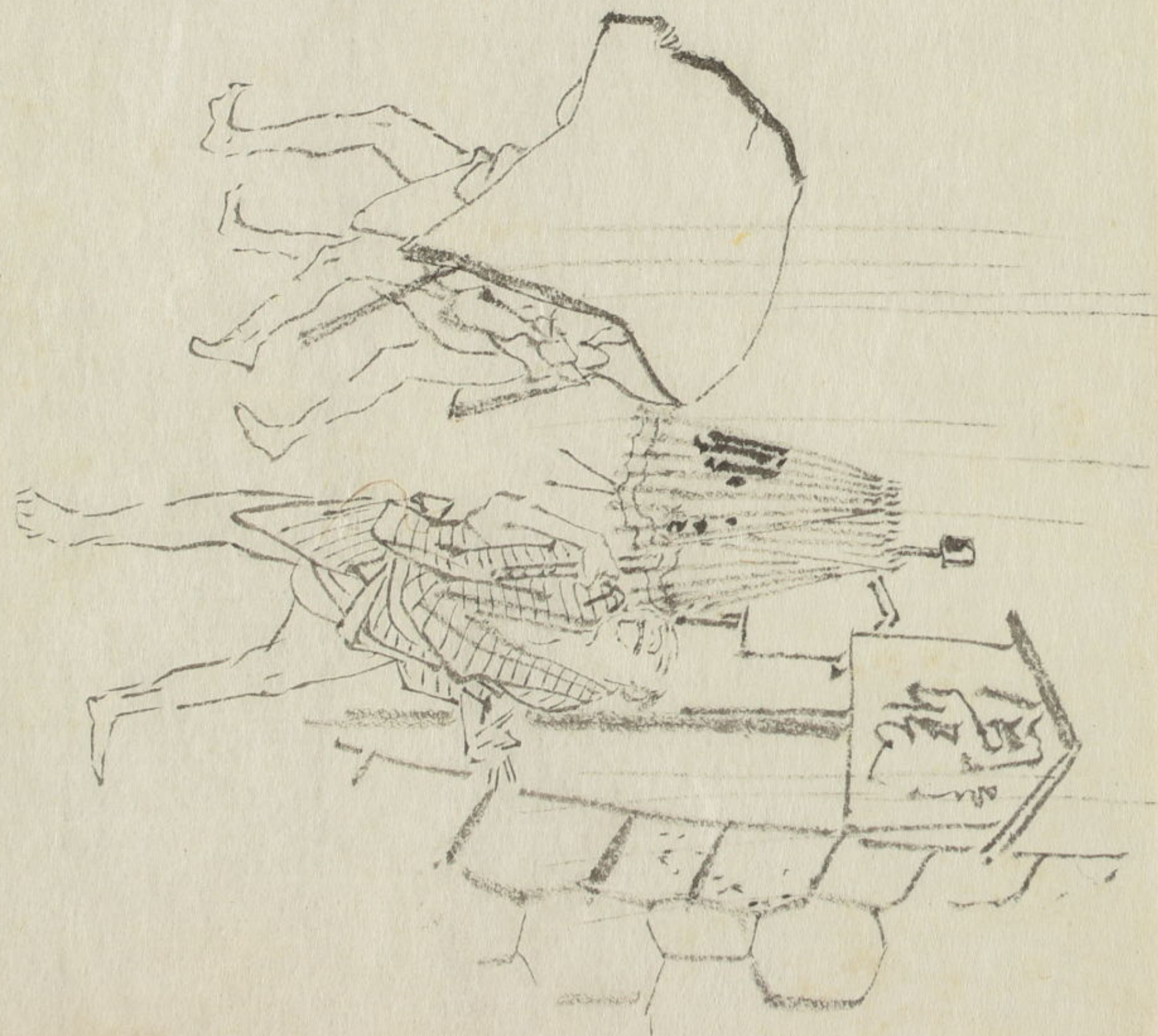


月十



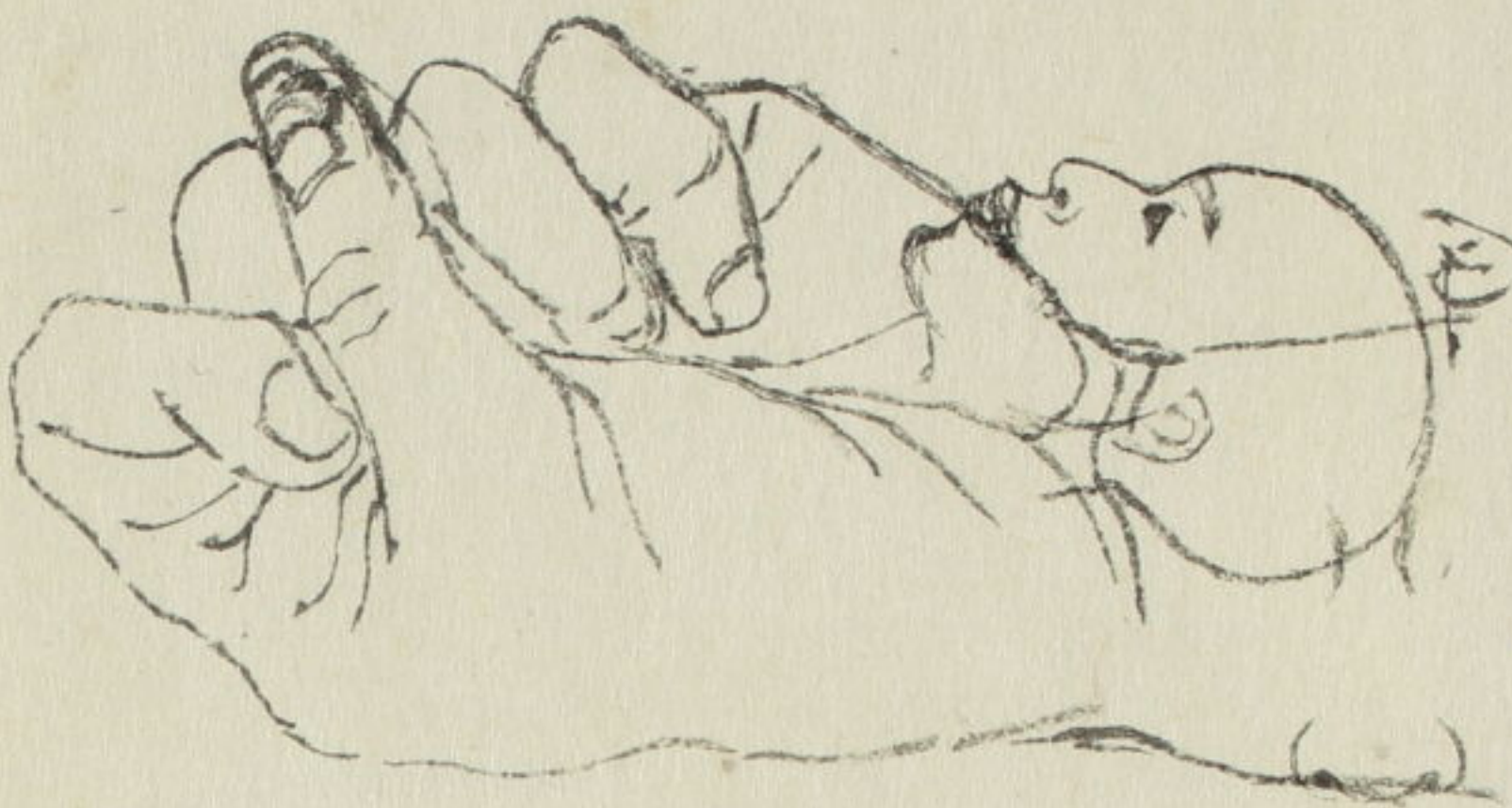
月十





ア
月
十八
日

皇女 皇女 皇女
皇女 皇女 皇女



明治七年一月十三日生

皇女 皇女
皇女 皇女



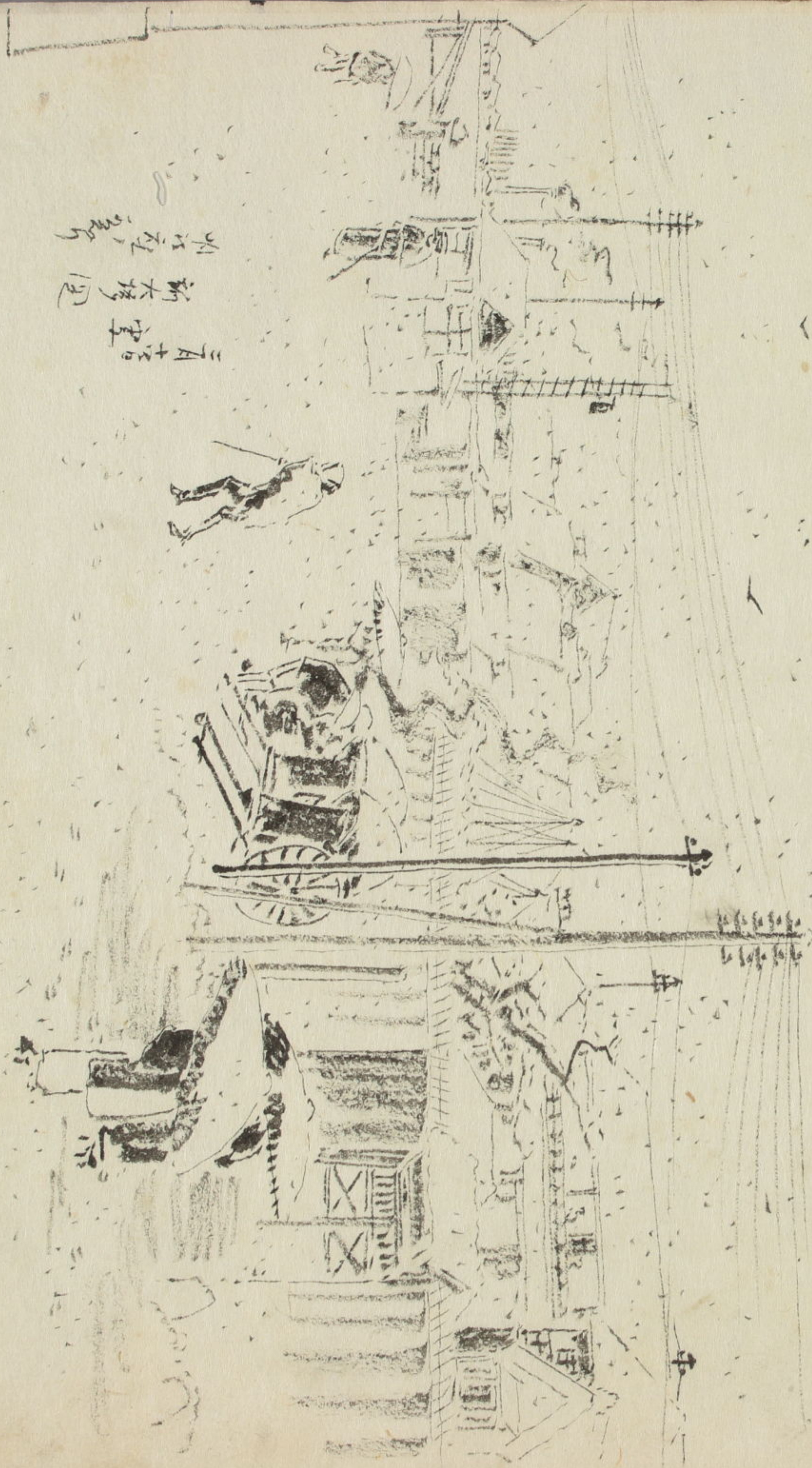
明治五年皇女八吉長
皇女八吉長

同世七年八月廿二日生

同世七年八月廿二日生

同世七年八月廿二日生

同世七年八月廿二日生



皇女 皇女
皇女 皇女



宿
 三宿
 宿
 宿

宿
 宿
 宿
 宿
 宿
 宿



千百年祭 京都の繁昌 (五)
四月三日 小林慶二郎手記
博覽會の所見
第二 美術館 (上)

美術館に入れ、下階の大抵繪畫を以て充たされたり、繪畫の陳列に就ては、其陳列に先だちて豫じめ嚴密の鑑査を遂げ、其鑑査に登第せしもののみ本館に陳列することとなりしと然るに、鑑査の局に當りし者、往々偏頗の所見を以て其偏頗を嚴密に實行したりしかば、取捨の當を失せしもの一にして、足らず終に玉石混淆の譏を免れざるに至り、而して鑑査員の眼に冷遇されしもの、中にて竹堂の屏風の如き、又青年中大家の間にある田中一花、梅村景山、森雄山、毛利延年諸氏の如き、美術館中に陳列されて天下の批評を受くるの榮を荷ふ能はずと雖も、此鑑査に登第せざりし故を以て、敢て其技倆を傷けず寧ろ其腕を神にし、其筆を靈にするを努めて可なり。

繪畫の部に於て其出品最も多きは京都府なり、今尾景年が墨繪山水の屏風筆力最も遒勁なるを見る、氏元來四條派の大家なれば、近來大に沈南蘋の筆意を慕ひ、勉めて之を摸するが故に、此山水の如きも亦一種の氣韻を備へ、確かに銀牌以上の價值あり之に反して、鈴木松年(四條派百年の子なり)が群仙の屏風の極めて拙劣にして、何が故に群仙と書題を付せしやを知らず、公平に之を言へば、化物の屯集といふ方穩當なるべく、決して繪畫として美術館中に入る可らざるものなり、此二を積極消極として、其他内海吉堂が鹿に鶴の屏風、望月玉泉が雪中の畫雁の屏風の如き、最も取るべきものなり、青年諸家の畫の一般に、大家よりも好成績にて、都路花香(楳嶺の門人)の辨財天の大幅の四邊眩さまで、美しく筆力最も超凡なり、河合玉堂(楳嶺の門人)の鶉飼の圖、氏生國美濃の鶉



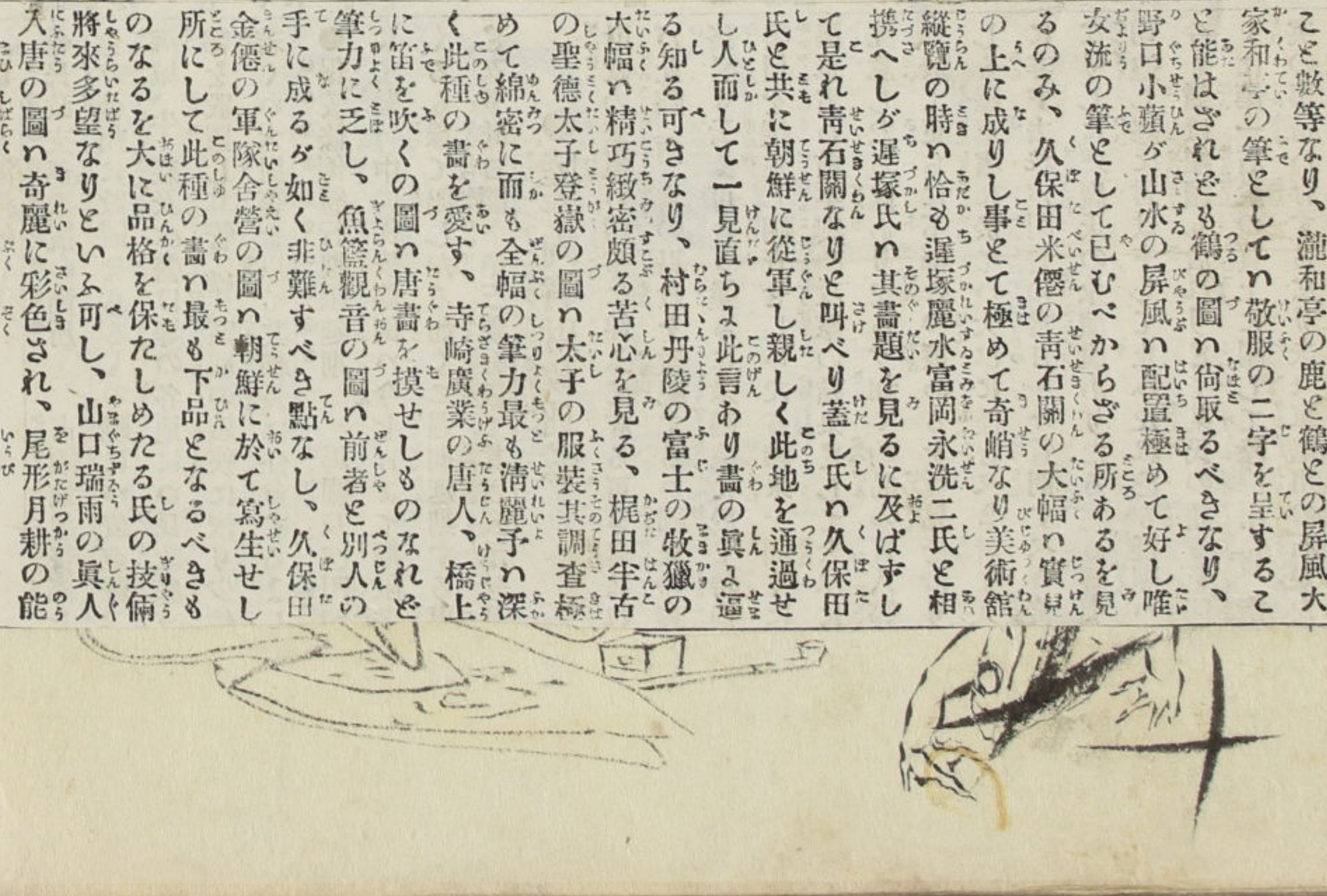
飼を寫生し、之に十分の意匠を加へたること、とて、模糊たる夜景の中に篝火の點々たる所、一見其地に臨むが如く、大家をして後へに睨む若たらしむるの技倆見はる、海外天年(百年の門人)の紙雜の圖、壇上に雛の上部のみを見せて、意匠極めて佳し、竹内棲鳳の松林に鹿の圖、氏平の技倆に比して如何に、拙なり、餘り早く大家に成過ると、其往其技倆の退歩することあり、氏たるもの大に心せざる可らず、淺井柳喬(竹堂の門人)の秋草に鹿の屏風、紅葉に鶯の圖とを出品せり、屏風の普通の筆なれども、畫幅の處に至りて、魚躍淵時、我辰天との筆意、躍如として、紙上に溢れたり、松本芳樹の虎の圖、竹堂の粉本に依りしものなる可けれども、足の形を極めて悪し、師の粉本、目錄のみを摸するを努めて、他に會得する所なく、遂に出藍の名を成すの日なからん歎、一見連城の延曆寺建立の圖、氏元來緻密の畫を得意とする、と見之、夥しき人物を描き來つて、一も復雜晦澁の痕跡を見ず、能手といふ可し、秀崎秀華の船の碇泊の圖、和洋折中にて如何にも拙なり、渡邊京都府知事の肖像、和洋折中の爲め、却つて眞に逼るを覺ふ、京都府の出品、其他に夥しけれども、瓦礫のみ筆を下して批評

を與ふるの要なし、愛知縣にて早川南の秋草に白鷺の圖、極めて妙なり、而も其の米穂と差別し難き迄に、假なる米穂、淑する所ありて然る乎、東京府にて橋本邦が龍虎相闘ふの屏風、流石に老練なり、所翁を摸し、虎の狩野派に據る、而して其氣雲となり、虎哮りて其聲風とかり、之に和して、注ぎ萬竿の綠竹、風雲の中に、するの状、快絶又、悽絶見るもの、唯其靈腕、するのみ、然れども、一の欠點あり、足の形、拙なる是なり、之にして、其他と副はん乎、必ずや金牌を得る、難からざりしならん、至憾、憾、羅漢の屏風、雅邦が最も得意のもの、其精緻と巧妙とに至つて、喋々を待たざるなり、川端玉章が漢宮と田舎との屏風、其師來章が筆意を存せしに止まり、何等の趣味も何等の意匠もなし、而して之が美術學校に教師たるもの、筆なりといふ誰が目にも受取れざるべし、野口幽谷が菊に鶉の屏風、椿山の粉本に據り、更に古畫に摸せしものなるべけれ、人をして感せしむるに足らず、松本楓湖が元寇の屏風、一の上陸の元兵と我兵と對陣する所、一の元寇覆没する所、なれど、意匠と云ひ筆力と云ひ、前者の後者に優る

こと、數等なり、瀧和亭の鹿と鶴との屏風、大和亭の筆として、敬服の二字を呈する、こと能はざれども、鶴の圖、尙取るべきなり、野口小嶺が山水の屏風、配置極めて好し、唯女流の筆として、已むべからざる所あるを見るのみ、久保田米偲の青石關の大幅の實景の上に成りし事とて、極めて奇峭なり、美術館縦覽の時、恰も、暹羅麗水富岡永洗二氏と相携へし、暹羅氏、其畫題を見るに及ばずして、是れ青石關なりと叫べり、蓋し、氏、久保田氏と共に朝鮮に従軍し、親しく此地を通過せし人、而して一見直ち、此言あり、畫の眞、遠る知る可きなり、村田丹波の富士の牧獵の大幅の精巧緻密、頗る苦心を見る、梶田半古の聖德太子登嶽の圖、太子の服裝、其調査極めて綿密に、而も全幅の筆力最も清麗、予、深く此種の畫を愛す、寺崎廣業の唐人、橋上に笛を吹く、の圖、唐畫を摸せしものなれども、筆力に乏し、魚籃觀音の圖、前者と別人の手に成るが如く、非難すべき點なし、久保田金徳の軍隊合營の圖、朝鮮に於て寫生せし所にして、此種の畫、最も下品となるべきものなるを、大に品格を保たしめたる、氏の技倆、將來多望なりといふ可し、山口瑞雨の真人、入唐の圖、奇麗に彩色され、尾形月耕の能と舞と暫との三幅、俗にして優美ならず、藤島華仙の那須與市の圖、神采活動、波濤の彩色最も巧なり、望月金鳳の鶯の圖、驚悍人に逼らんとするの姿勢を帶ぶ、大坂府の出品に、評する程のものなく、唯齋藤松洲の美人骸骨を持つ、の圖、大に意匠を凝せし、如きも、素人に解らず、深田直文の如意輪堂の大幅の人物の尙幼稚なるに比して、樹木のあしらひ、甚だ妙なり、之を要するに、東京府出品の繪畫、京都府の出品に比して優



こと、數等なり、瀧和亭の鹿と鶴との屏風、大和亭の筆として、敬服の二字を呈する、こと能はざれども、鶴の圖、尙取るべきなり、野口小嶺が山水の屏風、配置極めて好し、唯女流の筆として、已むべからざる所あるを見るのみ、久保田米偲の青石關の大幅の實景の上に成りし事とて、極めて奇峭なり、美術館縦覽の時、恰も、暹羅麗水富岡永洗二氏と相携へし、暹羅氏、其畫題を見るに及ばずして、是れ青石關なりと叫べり、蓋し、氏、久保田氏と共に朝鮮に従軍し、親しく此地を通過せし人、而して一見直ち、此言あり、畫の眞、遠る知る可きなり、村田丹波の富士の牧獵の大幅の精巧緻密、頗る苦心を見る、梶田半古の聖德太子登嶽の圖、太子の服裝、其調査極めて綿密に、而も全幅の筆力最も清麗、予、深く此種の畫を愛す、寺崎廣業の唐人、橋上に笛を吹く、の圖、唐畫を摸せしものなれども、筆力に乏し、魚籃觀音の圖、前者と別人の手に成るが如く、非難すべき點なし、久保田金徳の軍隊合營の圖、朝鮮に於て寫生せし所にして、此種の畫、最も下品となるべきものなるを、大に品格を保たしめたる、氏の技倆、將來多望なりといふ可し、山口瑞雨の真人、入唐の圖、奇麗に彩色され、尾形月耕の能と舞と暫との三幅、俗にして優美ならず、藤島華仙の那須與市の圖、神采活動、波濤の彩色最も巧なり、望月金鳳の鶯の圖、驚悍人に逼らんとするの姿勢を帶ぶ、大坂府の出品に、評する程のものなく、唯齋藤松洲の美人骸骨を持つ、の圖、大に意匠を凝せし、如きも、素人に解らず、深田直文の如意輪堂の大幅の人物の尙幼稚なるに比して、樹木のあしらひ、甚だ妙なり、之を要するに、東京府出品の繪畫、京都府の出品に比して優



千百年祭 京都の繁昌 (五)
四月三日 小林慶二郎手記
博覽會の所見
第二 美術館 (上)

順序よりすれば工業館の次に農林館機械館に移るが、然るに然ども未だ出品の整頓せざるもの多ければ先づ美術館に移る可し

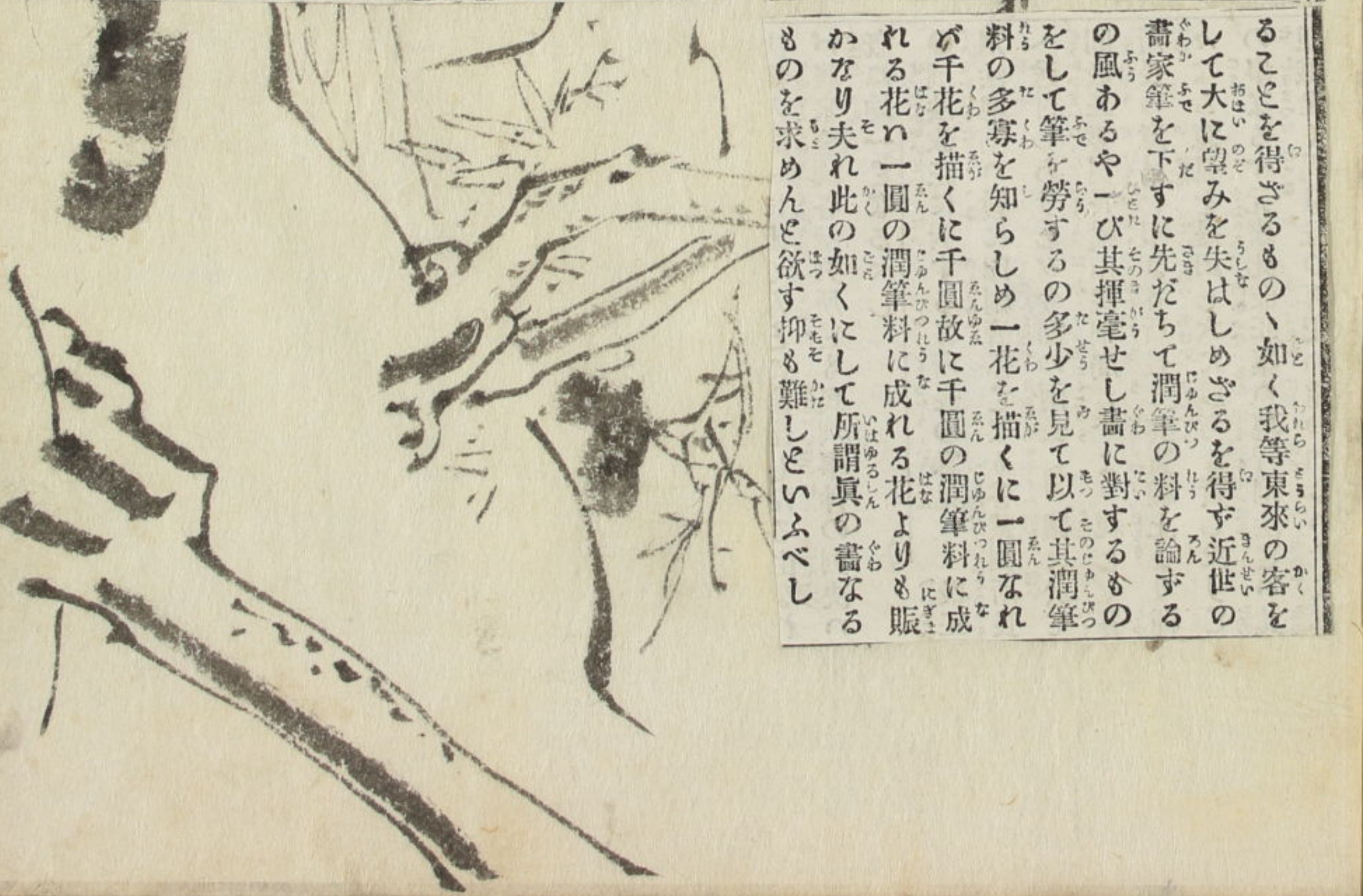
美術館に入れ、樓下の大抵繪畫を以て充たされたり、繪畫の陳列に就ては其陳列に先だちて豫じめ嚴密の鑑査を遂げ其鑑査に登第せしもののみ本館に陳列することとなりしと然るに鑑査の局に當りし者往々偏頗の所見を以て其偏頗を嚴密に實行したりしかば取捨の當を失せしもの一にして足らず終に玉石混淆の譏を免れざるに至り而して鑑査員の眼に冷遇されしもの、中にて竹堂の屏風の如き又青年中大家の間ある田中一花、梅村景山、森雄山、毛利延年諸氏の如き美術館中に陳列されて天下の批評を受くるの榮を荷ふ能はずと雖も此鑑査に登第せざりし故を以て敢て其技倆を傷けず寧ろ其腕を神にし其筆を靈にするを努めて可なり

繪畫の部に其出品最も多き、京都府なり今尾景年が墨繪山水の屏風筆力最も道勁なるを見る氏、元來四條派の大家なれば近來大に沈南蘋の筆意を慕ひ勉めて之を摸するが故に此山水の如きも亦一種の氣韻を備へ確かに銀牌以上の價值あり之に反して鈴木松年(四條派百年の子なり)が群仙の屏風の極めて拙劣にして何が故に群仙と書題を付せしやを知らず公平に之を言へば化物の屯集といふ方穩當なるべく決して繪畫として美術館中に入る可らざるものなり此二を積極消極として其他内海吉堂が鹿に鶴の屏風、望月玉泉が雪中の畫雁の屏風の如き最も取るべきものなり、青年諸家の畫の一般に大家よりも好成績にて都路花香(楳嶺の門人)の辨財天の大幅の四邊眩さまでに美しく筆力最も超凡なり、河合玉堂(楳嶺の門人)の鶉飼の圖、氏が生國美濃の鶉



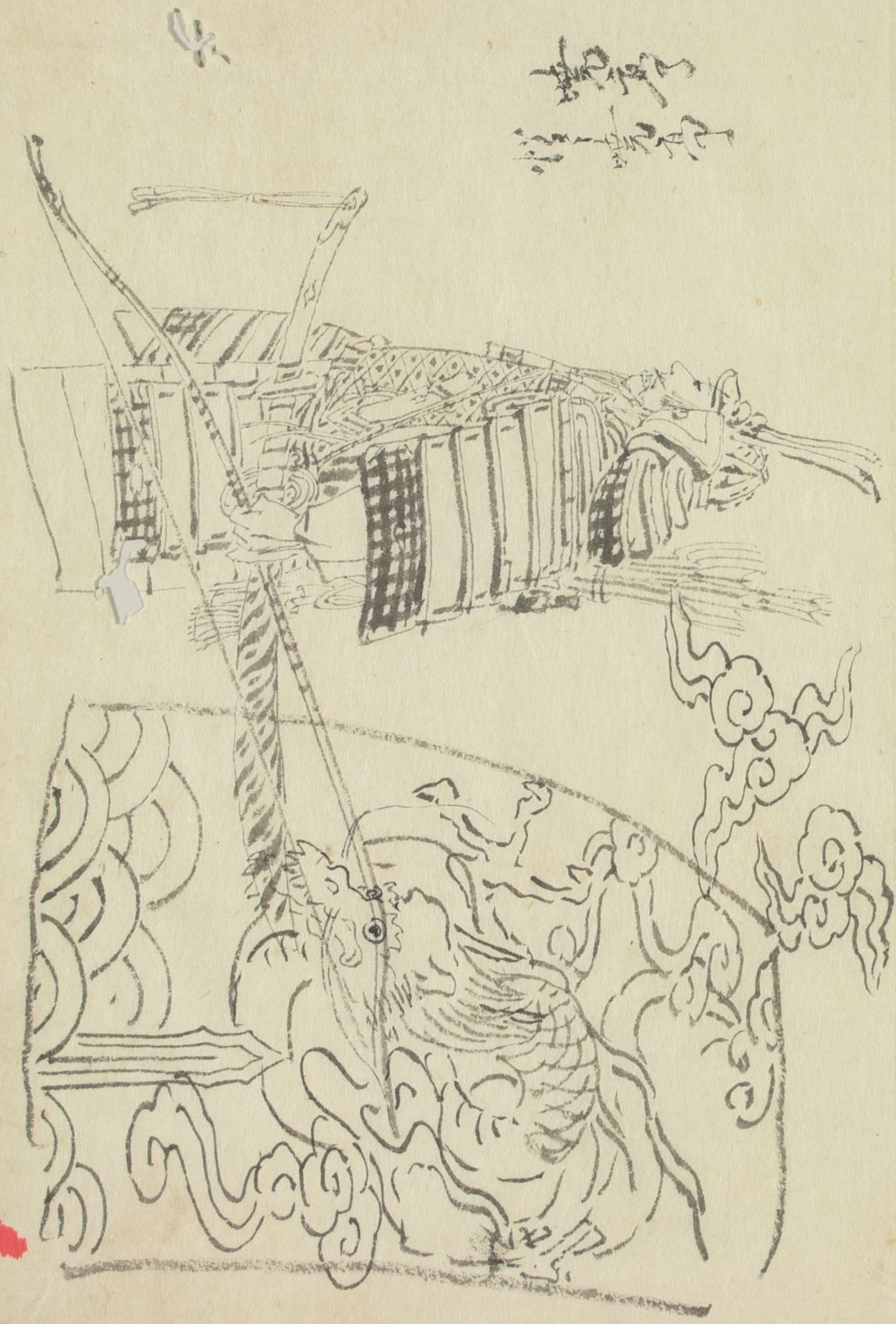
飼を寫生し之に十分の意匠を加へたることとて模倣たる夜景の中に篝火の點々たる所一見其地に臨むが如く大家をして後へに睨若たらしむるの技倆見はる、海外天年(百年の門人)の紙雜の圖、壇上に雛の上部のみを見せて意匠極めて佳し、竹内棲鳳の松林に鹿の圖、氏々平日の技倆に比して如何に拙なり餘り早く大家に成過るといふ往其技倆の退歩することあり氏たるもの大に心せざる可らず、淺井柳喬(竹堂の門人)の秋草に鹿の屏風と紅葉に鶯の圖とを出品せり屏風の普通の筆なれども畫幅の爲に至りて魚躍淵時我辰天との筆意躍如として紙上に溢れたり、松本芳樹の虎の圖、竹堂の粉本に依りしものなる可けれども足の形を極めて悪し師の粉本の目録のみを摸するを努めて他に會得する所なくんば遂に出藍の名を成すの日なからん歎、一見連城の延曆寺建立の圖、氏元來緻密の畫を得意とするを見之影し人物を描き來つて一も復雜晦澁の痕跡を見ず能手といふ可し、秀崎秀華の船の碇泊の圖、和洋折中にて如何にも拙なり渡邊京都府知事の肖像、和洋折中の爲め却つて眞に逼るを覺ふ京都府の出品其他に夥しけれど瓦礫のみ筆を下して批評

を興ふるの要なし、愛知縣にて早川南涯が秋草に白鷺の圖、極めて妙なり而も其筆法の米穂と差別し難き迄に假るる米穂に私淑する所ありて然る乎、東京府にて橋本雅邦が龍虎相闘ふの屏風、流石に老練なり龍の所翁を摸し虎の狩野派に據る而して龍嘯て其氣雲となり虎哮りて其聲風とかり急雨之に和して注ぎ萬竿の綠竹風雲の中に動搖するの狀快絶又悽絶見るもの唯其靈腕に感するのみ然れども一の欠點あり足の形詞の拙なる是なり之にして其他と副はん乎必ずや金牌を得る難からざりしならん至憾至憾、羅漢の屏風、雅邦が最も得意のもの其精緻と巧妙とに至つて喋々を待たざるなり、川端玉章が漢宮と田舎との屏風、其師來章が筆意を存せしに止まり何等の趣味も何等の意匠もなし而して之が美術學校に教師たるもの、筆なりとい誰が目にも受取れざるべし、野口幽谷が菊に鶉の屏風、椿山の粉本に據り更に古畫に摸せしものなるべけれ人をして感せしむるに足らず、松本楓湖が元寇の屏風、一の上陸の元兵と我兵と對陣する所、一、元寇覆没する所なれど意匠と云ひ筆力と云ひ前者の後者に優る



こと數等なり、瀧和亭の鹿と鶴との屏風大和亭の筆として敬服の二字を呈するこ能はざれども鶴の圖の尙取るべきなり、野口小菴が山水の屏風、配置極めて好し唯女流の筆として已むべからざる所あるを見るのみ、久保田米穂の青石關の大幅の實景の上に成りし事と極めて奇峭なり美術館縦覽の時、恰も暹塚麗水富岡永洗二氏と相携へし暹塚氏其書題を見るに及ばずして是れ青石關なりと叫べり蓋し氏久保田氏と共に朝鮮に従軍し親しく此地を通過せし人而して一見直ち此言あり畫の眞と運る知る可きなり、村田丹波の富士の牧獵の大幅の精巧緻密頗る苦心を見る、梶田半古の聖德太子登嶽の圖、太子の服裝其調査極めて綿密に而も全幅の筆力最も清麗予、深





石塔
一



石塔
一

石塔
一

石塔
一

本前正石原町
真野荒島了主

